

平成26年度

農薬展示圃成績書

平成27年1月

岩手県

〔(一社)岩手県植物防疫協会委託事業〕

目 次

作目名	作物名	展示薬剤名	対象病虫害等	実施公所名	ページ
水稲	水稲（移植）	ウィナー1キロ粒剤75	水田一年生雑草等	奥州農業改良普及センター	P1
				大船渡農業改良普及センター	P3
		ウィナージャンボ		中央農業改良普及センター（地域）	P5
				奥州農業改良普及センター	P7
		コメット1キロ粒剤		中央農業改良普及センター（地域）	P9
		ナギナタ1キロ粒剤		久慈農業改良普及センター	P11
	水稲（直播）	オサキニ1キロ粒剤		二戸農業改良普及センター	P13
		サンバード1キロ粒剤30		奥州農業改良普及センター	P15
		プレキープ1キロ粒剤		農業大学校	P17
	水稲（畦畔）	ラウンドアップマックスロード		奥州農業改良普及センター	P19
		中央農業改良普及センター（西和賀）	P21		
総 括					P24
畑作物	小麦	シナジオ乳剤	一年生雑草	一関農業改良普及センター	P25
	だいず	ブレバソンフロアブル5	マメシクイガ	中央農業改良普及センター（地域）	P27
	未成熟とうもろこし		アワノメイガ	八幡平農業改良普及センター	P29
	総 括				
野菜	トマト	アフェットフロアブル	うどんこ病、灰色かび病	八幡平農業改良普及センター	P32
	ピーマン	ディアナSC	アザミウマ類	奥州農業改良普及センター	P34
				大船渡農業改良普及センター	P36
				大船渡農業改良普及センター	P38
	キャベツ	ディアナSC	ヨトウムシ	大船渡農業改良普及センター	P40
	だいこん	パダンSG水溶剤	アオムシ（キスジノミハムシ）	宮古農業改良普及センター	P42
				宮古農業改良普及センター（岩泉）	P44
	レタス	シグナムWDG	すそ枯病（灰色かび病）	二戸農業改良普及センター	P46
	ほうれんそう	ユニフォーム粒剤	べと病（白斑病）	久慈農業改良普及センター	P48
	ねぎ	アフェットフロアブル	白絹病	盛岡農業改良普及センター	P50
総 括					P52
果樹	りんご	バイオセーフ	ヒメボクトウ	農業大学校	P53
		フェニックスフロアブル		農業大学校	P55
	ぶどう	フルーツセイバー	灰色かび病	二戸農業改良普及センター	P56
	おうとう	フルーツセイバー	灰星病（果実腐敗病）	宮古農業改良普及センター	P57
		ディアナWDG	オウトウショウジョウバエ	二戸農業改良普及センター	P59
	すもも	ナシヒメコン	ナシヒメシクイ、スモモヒメシクイ	二戸農業改良普及センター	P60
総 括					P63
花き	りんどう	オンリーワンフロアブル	葉枯病（炭疽病）	中央農業改良普及センター（地域）	P65
	きく（小ぎく）	アクセルキングフロアブル	オオタバコガ、アブラムシ類（白さび病）	中央農業改良普及センター（地域）	P67
	きく（輪ぎく）	コルト顆粒水和剤	アブラムシ類	二戸農業改良普及センター	P69
	総 括				
飼料作物	飼料用とうもろこし	アルファード液剤	一年生雑草	中央農業改良普及センター（地域）	P72
				奥州農業改良普及センター	P74
	総 括				

【水稲除草剤】

公所名：奥州農業改良普及センター
 担当者：小田中温美

1. 展示薬剤名 ウィナー1キロ粒剤75 (イソフェンカルバザン・プロモフチド・ベンスルフロンメチル粒剤)

2. 区分 一発処理剤

3. 展示方法

(1) 展示場所 奥州市江刺区稲瀬

(2) 対象雑草 水田一年生雑草、マツバ、ホタルイ、ハラモタカ、ミズガヤツリ、ウリカワ、クロフワイ、ヒルムシロ、セリ

(3) 耕種概要

(展示区)

土質 沖積 植代日 5/4 苗の種類 稚苗・中苗・成苗
 土性 壤土 移植日 5/7 育苗様式 平置き・プール
 日減水深 1.5cm/日 品種名 ひとめぼれ 移植方法 機械・手植
 苗の草丈 11cm(葉齢2.8葉) 処理時の草丈 11cm(葉齢2.8葉)

(対照区)：各項目とも展示区と同じ

(4) 普及展示規模 (展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する)

展示区 圃場区画 28.9 a 調査規模 0.6㎡ 2カ所
 対照区 圃場区画 27.1 a 調査規模 0.6㎡ 2カ所

(5) 散布時期及び散布量

区別	一発処理剤				中期除草剤 ※必要に応じて			
	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況
展示	ウィナー1キロ粒剤75	5/7 (田植同時処理)	1kg	ヒエ ー 葉 ホタルイ ー 葉 発生本数等 無し				ヒエ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等
対照	トップガンGT1キロ粒剤75	5/7 (田植後当日散布)	1kg	ヒエ ー 葉 ホタルイ ー 葉 発生本数等 無し				ヒエ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等

4. 展示成績（調査時期は処理40日後、中・後期剤を処理する場合は処理前までに実施）

区別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、風乾・ <u>生体</u> ）（本数）					調査日	6/17		水稻に対する薬害	総合評点
	一年生雑草					多年生雑草	総計	症状程度	収量比対慣行	
	ノビエ	カヤツリグサ	一年生広葉	マツバイ	ホタルイ					
展示	0.0	0.0	4.7 (ミゾハコベ、アゼナ)	0.0	0.9	0.0	5.6	無	100	A
	無処理区の主要雑草（アゼナ、オアブノメ、ホタルイ等 293g/m ² ）									
対照	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2	0.4	無	—	—
	無処理区の主要雑草（アゼナ、オアブノメ、ホタルイ等 405g/m ² ）									

*無処理区は草種とその多少を調査する。無処理区は展示区、対照区とも50cm×50cm1か所設置。

5. 考察

(1) 前年の残草状況

クログワイ、シズイが年々増加している。ヒエの発生量は少ない。

(2) 処理条件等

ア. 処理日は晴れ、弱風であった。

イ. 展示区は田植同時処理機（クボタこまきちゃんCS-20 6条田植機用）で処理し、その後、直ちに入水した。田植え同時処理機に残った展示除草剤については補正散布を行った。

ウ. 対照区は移植後入水し当日に背負い式動噴で散布した。

(3) 除草効果等

展示区は、一年生広葉雑草（ミゾハコベ、アゼナ）及びホタルイが残ったが、実用上問題ないレベルであった。

展示区、対照区とも処理後40日及び中干し後の7月下旬までヒエの発生はみられなかった。

(4) 薬害等

通常の植付深では薬害はみられなかった。

一部、植え付けが浅く根が露出しているところでは著しい黄化症状及び生育抑制がみられ回復しなかった。

(5) 作業性

田植え同時処理により効率的な作業が可能であった。

(6) 普及性等

作業性及び除草効果から普及性は高いと考えられる。

但し、圃場の均平あるいは硬さ（植穴の戻りが悪い）に問題がある場合は、薬害の面から田植え同時処理は注意が必要である。

【水稻除草剤】

公所名：大船渡農業改良普及センター
 担当者：藤原 敏

1. 展示薬剤名 ウィナー 1 キロ粒剤75 (イ^ソフェンカルハ^クゾン・ブ^レロモブ^チト^ク・ヘ^ンスルフロ^ンメチ^ル粒剤)

2. 区分 一発処理剤

3. 展示方法

(1) 展示場所：大船渡市日頃市町字上宿

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツバ^イ、ホタル^イ、ハラオモ^タガ^カ、ミズ^ガヤツ^リ、ウリ^カ、クロフ^イ、ヒル^ムシ^ロ、
 セ

(3) 耕種概要

(展示区)

土質 多湿黒ボク土 植代日4/30、5/1 苗の種類 稚^苗・中苗・成苗
 土性 埴壤土 移植日 5/6 育苗様式 平置き・プ^{ール}
 日減水深 1cm/日 品種名 ひとめぼれ 移植方法 機^械・手植
 苗の草丈 12.6cm(葉齢2.9葉) 処理時の草丈12.6 cm(葉齢2.9葉)

(対照区)

土質 多湿黒ボク土 植代日4/30、5/1 苗の種類 稚^苗・中苗・成苗
 土性 埴壤土 移植日 5/6 育苗様式 平置き・プ^{ール}
 日減水深 1cm/日 品種名 ひとめぼれ 移植方法 機^械・手植
 苗の草丈 12.6cm(葉齢2.9葉) 処理時の草丈12.6 cm(葉齢2.9葉)

(4) 普及展示規模 (展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する)

展示区 圃場区画 8 a 調査規模 0.25m² 2カ所
 対照区 圃場区画 7.6 a 調査規模 0.25m² 2カ所
 無処理区は、展示・対照区に各2ヶ所(1m²)設置

(5) 散布時期及び散布量

区別	一発処理剤				中期除草剤 ※必要に応じて			
	薬剤名	処理時期	薬量/10 a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量/10 a	処理時の雑草発生状況
展示	ウィナー 1キロ粒 剤75	5/8 (+2)	1kg	ヒ ^エ 0葉 ホタル ^イ 0葉 発生本数等 なし				ヒ ^エ 葉 ホタル ^イ 葉 発生本数等
対照	ヤイバ1 キロ粒剤	5/8 (+2)	1kg	ヒ ^エ 0葉 ホタル ^イ 0葉 発生本数等 なし				ヒ ^エ 葉 ホタル ^イ 葉 発生本数等

4. 展示成績（調査時期は処理40日後、中・後期剤を処理する場合は処理前までに実施）

区別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、風乾）（本数） 調査日 6/17								水稻に対する薬害		総合評価
	一年生雑草					多年生雑草		総計	症状程度	収量比対慣行	
	ノビエ	カヤツリグサ	一年生広葉 主にコナギ	マツバイ	ホタルイ	シズイ	クログワイ				
展示	0.32 (6)	0	4.2 (210)	0	0	0.14 (8)	0	4.66 (224)	無	110%	A
無	12.86 (30)	0	16.52 (676)	0	0	0.06 (12)	8.62 (168)	38.06 (886)			
対照	0.32 (4)	0	0.10 (2)	0	0	20.16 (314)	0	20.58 (320)	無	(100%)	—
無	4.20 (10)	0	7.60 (322)	0	0	50.60 (644)	0.56 (18)	62.96 (994)			

5. 考 察

(1) 前年の残草状況

水口付近を中心にシズイの発生が認められたが、全体的な発生量は多くなかった。

(2) 処理条件等

背負い式動力散布機で散布

散布時湛水条件（水深5cm） 散布後調査時まで湛水条件。

(3) 除草効果等

隣り合った2圃場で展示圃、対照圃を設置したが、無処理区の雑草の発生状況がやや異なったため、無処理区の発生状況も草種別に調査した。

展示圃の無処理区の主要雑草はヒエ、コナギ、クログワイが多発条件下であった。

無処理区の発生量も考慮して対照薬剤と比較すると、概ね対照薬剤と同等の効果と考えられるが、コナギに対する効果がやや劣った。

(4) 薬害等

特になし

(5) 作業性

対照薬剤と比較して、粒が散布直後から溶けだして目立つため、散布状況がわかりやすく、均一散布がしやすい。

(6) 普及性等

対照薬剤と同等の効果が認められ、薬害が認められなかったため普及性はあると考えられる。（ただし、本展示圃ではコナギに対する効果がやや劣ったため、多発圃場での使用には注意を要すると考えられる。）

【水稻除草剤】

公所名：中央農業改良普及センター（地域）

担当者：小岩央幸

1. 展示薬剤名 ウィナージャンボ（イ^oフェンカルバゾⁿ・プロモ^oチト^o・ヘン^oスル^oフロン^oメル^o粒^o剤）

2. 区分 一発処理剤

3. 展示方法

(1) 展示場所：北上市滑田

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツバ^イ、ホタル^イ、ハラモ^タガ^カ、ミズ^ガヤ^ツリ、ウリ^カ、クロ^フイ、ヒル^シロ、
セ

(3) 耕種概要

(展示区)

土質 黒ボク土 植代日 5/11 苗の種類 稚苗・中苗・成苗
 土性 埴壤土 移植日 5/15 育苗様式 平置き・プール
 日減水深 1.0cm/日 品種名 ひとめぼれ 移植方法 機械・手植
 苗の草丈 14.5cm(葉齢 3葉) 処理時の草丈 14.5cm(葉齢 3葉)

(対照区)

土質 黒ボク土 植代日 5/11 苗の種類 稚苗・中苗・成苗
 土性 埴壤土 移植日 5/15 育苗様式 平置き・プール
 日減水深 1.0cm/日 品種名 ひとめぼれ 移植方法 機械・手植
 苗の草丈 15.0cm(葉齢 3葉) 処理時の草丈 15.0cm(葉齢 3葉)

(4) 普及展示規模

展示区 圃場区画 26 a 調査規模 1㎡ 2カ所 (無処理区 1㎡ 2カ所)
 対照区 圃場区画 30 a 調査規模 1㎡ 2カ所

(5) 散布時期及び散布量

区別	一発処理剤				中期除草剤 ※必要に応じて			
	薬剤名	処理時期	薬量/10 a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量/10 a	処理時の雑草発生状況
展示	ウィナージャンボ	5/20 移植5 日後	小包装 (パック) 10個 (500g)	ヒ ^o エ - 葉 ホタル ^イ - 葉 発生本数等 0本	なし			ヒ ^o エ 葉 ホタル ^イ 葉 発生本数等
対照	ヤイバジャンボ	5/20 同上	同上	ヒ ^o エ - 葉 ホタル ^イ - 葉 発生本数等 0本	なし			ヒ ^o エ 葉 ホタル ^イ 葉 発生本数等

4. 展示成績

区別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、 <u>風乾</u> ・生体）（本数）							水稻に対する薬害		総合 評点
	調査日 6/23（処理34日後）							症状 程度	収量比 対慣行	
	一年生雑草					多年生 雑草	総計			
ノビエ	カヤツ リグサ	一年生 広葉	マツ バイ	ホタ ルイ						
展示	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	無	100%	A
無処 理区	0.00	0.00	1.92 (340本)	0.00	0.08 (8本)	0.00	2.00 (348本)			
対照	0.07 (3本)	0.00	0.18 (50本)	0.00	0.04 (13本)	（クログワイ） 0.44 (7本)	0.29 (66本)	無	-	-
無処理区の主要雑草（無処理区は設置していない）										

* 無処理区は草種とその多少を調査する。

5. 考 察

(1) 前年の残草状況

展示区ではヒエ、シズイが毎年発生。対照区ではクログワイが毎年発生。

(2) 処理条件等

展示区、対照区ともに畦畔から投入。

(3) 除草効果等

展示区では雑草の発生は全く見られなかったが、無処理区、対照区ともに一年生雑草、多年生雑草の発生が見られたことから、十分な除草効果があったと思われる。また、ノビエについては、残草調査（6/23）以降も発生がほとんど見られなかった。

(4) 薬害等

特に見られなかった。

(5) 作業性

畦畔から投入可能な面積であれば作業性に優れる。

(6) 普及性等

雑草の発生が見られなかったことに加え、薬害、作業性等問題なかったことから、普及性は高いと考えられる。ただし、ジャンボ剤のため、使用可能な面積は限られる。

【水稲除草剤】

公所名：奥州農業改良普及センター
 担当者：小田中温美

1. 展示薬剤名 ウィナージャンボ (イ^oフェンカルハ^oゾン・ブ^oロモブ^oチト^o・ヘ^oンスルフロ^oメチル^o粒^o剤)

2. 区分 一発処理剤

3. 展示方法

(1) 展示場所 奥州市江刺区稲瀬

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツバ^イ、ホタル^イ、ハラモタ^ガカ、ミズ^ガヤツリ、ウリ^カワ、クロ^フワイ、ヒル^ムシロ、セ^リ

(3) 耕種概要

(展示区)

土質 沖積 植代日 5/4 苗の種類 稚苗・中苗・成苗
 土性 壤土 移植日 5/7 育苗様式 平置き・プール
 日減水深 1.5cm/日 品種名 ひとめぼれ 移植方法 機械・手植
 苗の草丈 11cm(葉齢2.8葉) 処理時の草丈 11cm(葉齢2.8葉)

(対照区)：各項目とも展示区と同じ

(4) 普及展示規模 (展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する)

展示区 圃場区画 43.6 a (短辺34m) 調査規模 0.6m² 2カ所
 対照区 圃場区画 27.1 a 調査規模 0.6m² 2カ所

(5) 散布時期及び散布量

区別	一発処理剤				中期除草剤 ※必要に応じて			
	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況
展示	ウィナージャンボ	5/8 (田植翌日)	小包装(パック) 10個 (500g)	ヒ ^o エ ー 葉 ホタル ^イ ー 葉 発生本数等 無 し	/	/	/	ヒ ^o エ ー 葉 ホタル ^イ ー 葉 発生本数等
対照	トップガンGT1キロ粒剤75	5/7 (田植当日)	1kg	ヒ ^o エ ー 葉 ホタル ^イ ー 葉 発生本数等 無 し	/	/	/	ヒ ^o エ ー 葉 ホタル ^イ ー 葉 発生本数等

4. 展示成績（調査時期は処理40日後、中・後期剤を処理する場合は処理前までに実施）

区別	除草効果（草種別残草量 g / m ² 、風乾・ <u>生体</u> ）（本数） 調査日 6/17						水稻に対する薬害		総合評点	
	一年生雑草					多年生雑草	総計	症状程度		収量比対慣行
	ノビエ	カヤツリグサ	一年生広葉	マツバイ	ホタルイ					
展示	0.0	0.0	0.1 (ミゾハコベ)	0.0	0.2	0.0	0.3	無	100	A
無処理区の主要雑草（設置せず）										
対照	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2	0.4	無	—	—
無処理区の主要雑草（アゼナ、オアアノメ、ホタルイ等 405g/m ² ）										

* 無処理区は草種とその多少を調査する。対照区のみ無処理区50cm×50cm 1か所設置。

5. 考察

(1) 前年の残草状況

クログワイ、シズイが年々増加している。ヒエの発生量は少ない。

(2) 処理条件等

ア. 展示区は田植翌日に畦畔およびほ場内から展示剤を投げ入れた。処理時は晴れ、風はほとんどなかった。処理時の水深は5cm、藻類の発生はなかった。

イ. 対照区は、移植当日に背負い式動噴で散布した。

(3) 除草効果等

展示区は、一年生広葉雑草（ミゾハコベ）及びホタルイが少し残った。

展示区、対照区とも処理後40日及び中干し後の7月下旬までヒエの発生はみられなかった。

(4) 薬害等

通常の植付深では薬害はみられなかった。

一部、植え付けが浅く根が露出しているところでは著しい黄化症状及び生育抑制がみられ回復しなかった。

(5) 作業性

短辺30mまでのほ場であれば作業性に優れる。

(6) 普及性等

短辺30mまでのほ場であれば、作業性及び除草効果から普及性は高いと考えられる。

但し、圃場の均平あるいは硬さ（植穴の戻りが悪い）に問題がある場合は、拡散性および薬害の面から注意を要する。

【水稲除草剤】

公所名：中央農業改良普及センター（地域）
 担当者：小岩央幸

1. 展示薬剤名 コメット1キロ粒剤（テフリルトリオン・ピラクロニル・メタゾスルフロン粒剤）

2. 区分 一発処理剤

3. 展示方法

(1) 展示場所：北上市滑田

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツバイ、ホタルイ、ウリカ、ミズガヤツリ、ヘラオモダカ、ヒルムシロ、セリ

(3) 耕種概要

(展示区)

土質 黒ボク土 植代日 5/11 苗の種類 稚苗・**中苗**・成苗
 土性 埴壤土 移植日 5/15 育苗様式 平置き・**プール**
 日減水深 1.0cm/日 品種名 ひとめぼれ 移植方法 **機械**・手植
 苗の草丈 14.5cm(葉齢 3葉) 処理時の草丈 14.5cm(葉齢 3葉)

(対照区)

土質 黒ボク土 植代日 5/11 苗の種類 稚苗・**中苗**・成苗
 土性 埴壤土 移植日 5/15 育苗様式 平置き・**プール**
 日減水深 1.0cm/日 品種名 ひとめぼれ 移植方法 **機械**・手植
 苗の草丈 15.0cm(葉齢 3葉) 処理時の草丈 15.0cm(葉齢 3葉)

(4) 普及展示規模

展示区 圃場区画 26 a 調査規模 1㎡ 2カ所 (無処理区 1㎡ 2カ所)
 対照区 圃場区画 30 a 調査規模 1㎡ 2カ所

(5) 散布時期及び散布量

区別	一発処理剤				中期除草剤 ※必要に応じて			
	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況
展示	コメット1キロ粒剤	5/20 移植5日後	1kg	ヒェ - 葉 ホタルイ - 葉 発生本数等 0本	なし			ヒェ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等
対照	ヤイバジャンボ	5/20 同上	小包装(パック) 10個 (500g)	ヒェ - 葉 ホタルイ - 葉 発生本数等 0本	なし			ヒェ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等

4. 展示成績

区別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、 風乾 ・生体）（本数）							水稻に対する薬害		総合 評点
	調査日 6/23（処理34日後）							症状 程度	収量比 対慣行	
	一年生雑草					多年生 雑草	総計			
ノビエ	カヤ ツリ グサ	一年生 広葉	マツ バイ	ホタル ルイ						
展示 ①	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	無	100%	A
展示 ②	0.46 (26本)	0.00	0.00	0.00	0.07 (12本)	0.00	0.53			
無処 理区	3.12 (12本)	0.00	6.16 (536本)	0.00	1.60 (24本)	クログワイ 0.20 (4本)	10.88 (572本)			
対照	0.07 (3本)	0.00	0.18 (50本)	0.00	0.04 (13本)	クログワイ 0.44 (7本)	0.29 (66本)	無	-	-
無処理区の主要雑草（無処理区は設置していない）										

5. 考 察

（1）前年の残草状況

展示区ではヒエ、シズイが多く発生。対照区ではクログワイが発生。

（2）処理条件等

展示区は畦畔から背負式動力散布機により散布。対照区は畦畔から投入。

（3）除草効果等

対照区、無処理区と比較し、一年生広葉雑草等に対して十分除草効果が認められたが、ホタルイがやや残草した。

展示区のノビエについては、葉数2～3枚のものが多発しているところ（水口付近）（例年多発している）に調査区の1ヵ所を設定したため、やや残草した展示成績となっているが、残草調査後、ほとんど枯死した。

（4）薬害等

特に見られなかった。

（5）作業性

特に問題はなかったが、対照区のジャンボ剤と比べれば、労力、時間ともにかかった。

（6）普及性等

粒剤のため、散布にやや労力はかかったが、除草効果は対照区と比較して十分認められたことから、普及性はあると考えられる。

【水稻除草剤】

公所名：久慈農業改良普及センター

担当者：藤澤由美子

1. 展示薬剤名 コメット1キロ粒剤（テフリルトリオン・ピラクロニル・メタゾスルフロン粒剤）

2. 区分 一発処理剤

3. 展示方法

(1) 展示場所：野田村泉沢

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツバイ、ホタルイ、ウリカ、ミズガヤツリ、ヘラオモダカ、ヒルムシロ、セリ

(3) 耕種概要

(展示区)

土質 褐色低地土 植代日 5月21日 苗の種類 稚苗・**中苗**・成苗

土性 埴壤土 移植日 5月23日 育苗様式 **平置き**・プール

日減水深 1.5cm/日 品種名 いわてっこ 移植方法 **機械**・手植

苗の草丈 16.1cm(葉齢3.9葉) 処理時の草丈 21.2cm(葉齢 4.8葉)

(対照区)

土質 褐色低地土 植代日 5月21日 苗の種類 稚苗・**中苗**・成苗

土性 埴壤土 移植日 5月23日 育苗様式 **平置き**・プール

日減水深 1.5cm/日 品種名 いわてっこ 移植方法 **機械**・手植

苗の草丈 16.1cm(葉齢3.9葉) 処理時の草丈 16.1cm(葉齢 3.6葉)

(4) 普及展示規模（展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する）

展示区 圃場区画 10 a 調査規模 0.25㎡ 3カ所

対照区 圃場区画 12 a 調査規模 0.25㎡ 3カ所 ※無処理区設定できず

(5) 散布時期及び散布量

区別	一発処理剤				中期除草剤 ※必要に応じて			
	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況
展示	コメット1キロ粒剤	6/2(+10)	1kg	ヒエ 1.5葉 ホタルイ 1.0葉 発生本数等	ヒエクリーン1キロ粒剤	6/19(+27)	1kg	ヒエ 3.0葉 ホタル 2.0葉 発生本数等 多
対照	バッチリ1キロ粒剤	5/23(+0)	1kg	ヒエ 未発生 ホタルイ 発生始 発生本数等	ヒエクリーン1キロ粒剤	6/19(+27)	1kg	ヒエ 3.0葉 ホタルイ 2.0葉 発生本数等 中

4. 展示成績（調査時期は処理40日後、中・後期剤を処理する場合は処理前までに実施）

区別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、 <u>風乾</u> ・生体）（本数）調査日 6/19					多年生 雑草	総計	水稻に対する薬害		総合 評点
	一年生雑草							症状 程度	収量比 対慣行	
	ノビエ	カヤツ リグサ	一年生 広葉	マツ バイ	ホタル イ					
展示	4.8 (137本)	—	—	—	t (11本)	シズイ 0.2g (22本)	4.8	無	100%	B
無処理区の主要雑草（ノビエ - (2本)、ホタルイ 0.1g (18本)）										
対照	0.1 (9本)	—	—	—	t (15本)	シズイ 0.1g (5本)	0.1	無	—	
無処理区の主要雑草（無処理区設置せず）										

* 無処理区は草種とその多少を調査する。

5. 考 察

(1) 前年の残草状況

展示区は、ノビエ、シズイ、ホタルイの発生量がほ場全体に多く、例年、雑草が多発するほ場。慣行区は、ノビエ、ホタルイの発生量が水口、水尻付近に多かった。

(2) 処理条件等

展示区は、背負式動力散布機により散布。慣行区は、田植同時散布機により散布。

(3) 除草効果等

展示区は、田面がやや高くなっている（処理時田面は出ていなかった）ほ場の真ん中（残草調査地点を含む）を中心にノビエ、ホタルイ、シズイが多発したため、中期除草剤（ヒエクリーン1キロ粒剤）を散布。残草量は対照区と比較しても、無処理区と比較しても多い結果となった。

(4) 薬害等

なし

(5) 作業性

特に問題なし。

(6) 普及性等

生産者からの聞き取りによると、展示区では昨年ノビエ、シズイ、ホタルイが多発し、中期除草剤を散布しても多くが残草してしまった。今年は展示除草剤を使用した結果、初期の雑草の発生量は昨年より減少した。このことを考慮すると、普及の可能性はあると考えられる。

また、当地域では担い手を中心に田植同時散布機が普及しているため、田植同時処理が可能であればさらに普及の可能性は高まると思われる。

【水稻除草剤】

公所名：二戸農業改良普及センター
 担当者：工藤佳徳

1. 展示薬剤名 ナギナタ 1 キロ粒剤 (オキサジクロメホン・ピリミスルファン・ベンゾビシクロン粒剤)

2. 区分 一発処理剤 (田植同時)

3. 展示方法

(1) 展示場所：九戸村荒谷

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツバ、ホタルイ、ウリカ、ミズガヤツリ、ヘラホトダカ、ホトダカ、クログワイ、ヒルムシロ、セリ

(3) 耕種概要

(展示区)

土質 黒ボク 植代日 5/24 苗の種類 稚苗・**中苗**・成苗
 土性 植壤土 移植日 5/26 育苗様式 平置き・**プール**
 日減水深 1.5cm/日 品種名 カグヤモチ 移植方法 **機械**・手植
 苗の草丈 18.8cm(葉齢3.0葉) 処理時の草丈 18.8 cm(葉齢3.0葉)

(対照区)

土質 黒ボク 植代日 5/24 苗の種類 稚苗・**中苗**・成苗
 土性 植壤土 移植日 5/26 育苗様式 平置き・**プール**
 日減水深 1.5cm/日 品種名 カグヤモチ 移植方法 **機械**・手植
 苗の草丈 18.8cm(葉齢3.0葉) 処理時の草丈 18.8 cm(葉齢3.0葉)

(4) 普及展示規模 (展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する)

展示区 圃場区画 20 a 調査規模 0.25㎡ 3カ所
 対照区 圃場区画 13 a 調査規模 0.25㎡ 3カ所

(5) 散布時期及び散布量

区別	一発処理剤				中期除草剤 ※必要に応じて			
	薬剤名	処理時期	薬量/10 a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量/10 a	処理時の雑草発生状況
展示	ナギナタ 1キロ粒剤	田植同時処理 (5/26)	1kg	ヒコエ ー 葉 ホタルイ ー 葉 発生本数等 ー				ヒコエ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等
対照	イッポン 1キロ粒剤75	田植同時処理 (5/26)	1kg	ヒコエ ー 葉 ホタルイ ー 葉 発生本数等 ー				ヒコエ 葉 ホタルイ 葉 発生本数等

4. 展示成績（調査時期は処理40日後、中・後期剤を処理する場合は処理前までに実施）

区別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、 <u>風乾</u> ・生体）（本数）調査日 7/8						水稻に対する薬害		総合評点	
	一年生雑草					多年生雑草	総計	症状程度		収量比対慣行
	ノビエ	カヤツリグサ	一年生広葉	マツバイ	ホタルイ					
展示	—	—	—	—	t 4本	—	t (4本)	極微	100	A
無処理区の主要雑草（ホタルイ、アオミドロ）										
対照	—	—	0.2 8本	—	—	—	0.2 (8本)	極微	—	—
無処理区の主要雑草（一年生広葉(オオアブノメ)										

* 無処理区は草種とその多少を調査する。

5. 考察

(1) 前年の残草状況

主な残草は広葉雑草であるが、発生量は少なかった。

(2) 処理条件等

田植同時処理 株式会社クボタ「こまきちゃん」使用

(3) 除草効果等

ホタルイの後発はあったが、発生量も少なく、水稻の生育・作業には問題なかった。
除草効果は非常に高かった。

(4) 薬害等

極微程度の生育抑制はあったが、すぐに回復し、水稻の生育には影響がほとんどなかった。

(5) 作業性

本剤は田植同時処理も行えるため、省力性は高い。

(6) 普及性等

担当農家は、以前から田植同時処理を使用しており、散布作業については特に問題はなかった。また、除草効果は高いことから、普及性は高いといえる。

【水稻除草剤】

公所名：奥州農業改良普及センター
 担当者：門間 剛

1. 展示薬剤名 オサキニ1キロ粒剤（イマゾスルフロン・ピリミノバックメチル・プロモブチド粒剤）

2. 区分 直播栽培（播種同時・初期剤）

3. 展示方法

(1) 展示場所：奥州市前沢区生母

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツバイ、ホタルイ、ウリカ、ミズガヤツリ、ヒルムシロ、セリ

(3) 耕種概要

(展示区)

土質 灰色低地土 植代日 5/4 播種日 5/9 品種名 萌えみのり
 土性 埴壤土 直播方式 湛水直播（表面播種）
 播種様式 点播 コーティング資材 鉄
 日減水深 1.2cm/日 落水期間 5/14～25（12日間）

(対照区)

土質 灰色低地土 植代日 5/4 播種日 5/9 品種名 萌えみのり
 土性 埴壤土 直播方式 湛水直播（表面播種）
 播種様式 点播 コーティング資材 鉄
 日減水深 1.2cm/日 落水期間 5/14～25（12日間）

(4) 普及展示規模（展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する）

展示区 圃場区画 30 a 調査規模 0.6㎡ 2カ所
 対照区 圃場区画 37 a 調査規模 0.6㎡ 2カ所

(5) 散布時期及び散布量

区別	初期除草剤				初・中期一発除草剤			
	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況
展示	オサキニ1キロ粒剤	5/9 (播種同時)	760g	ヒェ 未発生 ホタルイ 未発生 発生本数等 なし	センイチMX1キロ粒剤	5/28	1kg	ヒェ 1.0葉 ホタルイ 1.5葉 発生本数等 多
対照	サンバード1キロ粒剤	5/9 (播種同時)	810g	ヒェ 未発生 ホタルイ 未発生 発生本数等 なし	トップガン250グラム	5/28	250g	ヒェ 2.2葉 ホタルイ 2.1葉 発生本数等 少

4. 展示成績（調査時期は一発除草剤処理前までに実施）

区別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、風乾・ <u>生体</u> ）（本数）調査日5/26						水稻に対する薬害		総合評点	
	一年生雑草					多年生雑草	総計	症状程度		収量比対慣行
	ノビエ	カヤツリグサ	一年生広葉（アゼナ）	マツバイ	ホタルイ					
展示	0.3 (12.5本)	0	0.7 (545本)	0	t (5.8本)	0	1.0	なし	100%	A
無処理区の主要雑草（アゼナ、ホタルイ、ノビエ）										
対照	0.0 (1.7本)	0	0.0 (4.2本)	0	0.0 (5.8本)	0	0.0	なし	—	—
無処理区の主要雑草（アゼナ、ホタルイ）										

* 無処理区は草種とその多少を調査する。

5. 考察

(1) 前年の残草状況

展示区、対照区とも前年は鉄コーティング直播により水稻栽培したほ場であった。目立った雑草は、オモダカ、クログワイで主に水口側に発生が多かった。

(2) 処理条件等

こまきちゃん（CS-30）により、播種同時散布。

(3) 播種時及び播種後の水管理方法

落水播種し、播種後ただちに入水した。

(4) 除草効果等

展示区は対照区と比較して、ノビエとアゼナの発生が多かった。ただし、ノビエについては対照区より発生本数が多かったものの葉令が進んでおらず、一発剤で十分に除草できる大きさに抑制されていたことから、初期剤としての効果があったと考えられる。

アゼナについてはSU剤への抵抗性が疑われ、残草量が多かった。なお、一発剤処理時の葉令は概ね2葉期で、一発剤処理後の発生はみられなかった。

6/24の達観調査で発生していた雑草は、多年生のオモダカ、クログワイであった。

(5) 薬害等

薬害は認められなかった。

(6) 作業性

播種同時施用に対応しており、作業性に問題は無い。

(7) 普及性等

薬害が確認されなかったことから、体系処理の前処理剤として普及性は高いと考えられる。

ただし、播種同時散布機のボリューム設定どおりに薬剤が落ちない場合があるため、吐出量の調整は残量を確認しながらしっかり実施する必要がある。

また、SU系除草剤抵抗性アゼナの発生が多く見られる圃場では、SU系以外の成分を組み合わせた一発処理剤や中期剤との体系処理を行うこと。

【水稻除草剤】

公所名：農業大学校

担当者：日影勝幸

1. 展示薬剤名 サンバード1キロ粒剤30 (ピラゾレート粒剤)

2. 区分 直播栽培 (播種同時・初期剤)

3. 展示方法

(1) 展示場所：胆沢郡金ヶ崎町六原蟹子沢14 ※基盤整備2年目

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツバエ、ホタルイ、ウリカ

(3) 耕種概要

(展示区)

土質 非アロフェン質黒ボク土 植代日 5/5 播種日 5/9 品種名 どんぴしゃり

土性 埴壤土 直播方式 湛水直播 (表面播種)

播種様式 点播 (クボタ社製鉄まきちゃん) コーティング資材 鉄 (0.5倍重)

日減水深 0.5 cm/日 落水期間 5/20~5/28 (8日間湿潤状態)

(対照区) ※無除草区に対する残草量で比較

土質 植代日 播種日 品種名

土性 直播方式 湛水直播 (表面播種・土中播種)・乾田直播

播種様式 点播・条播・散播 コーティング資材 鉄・カルパー・なし

日減水深 cm/日 落水期間 ~ (日間)

(4) 普及展示規模 (展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する)

展示区 圃場区画 100 a 調査規模 0.3 m² 3 カ所

無除草区 圃場区画 10 m² 調査規模 0.09 m² 1 カ所

(5) 散布時期及び散布量

区別	初期剤				初・中期一発除草剤 ※必要に応じて			
	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量/10a	処理時の雑草発生状況
展示	サンバード1キロ粒剤30	5/9 (+0)	1kg	ヒビエ 発生前 ホタルイ 発生前 発生本数等：無	トップガンフロアブル	5/28 (+19)	500ml	ヒビエ 1.5 葉 ホタルイ 発生前 発生本数等：極少
無除草	—	—	—	ヒビエ 発生前 ホタルイ 発生前 発生本数等：無	なし	—	—	ヒビエ 2.8 葉 ホタルイ 発生始 発生本数等：

4. 展示成績（調査時期は一発除草剤処理前までに実施、処理後19日後、一発処理剤直前）

区別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、風乾）（本数） 調査日 5/28						水稻に対する薬害		総合評点	
	一年生雑草					多年生雑草	総計	症状程度		収量比対慣行
	ノビエ	カヤツリグサ	一年生広葉	マツバイ	ホタルイ					
展示	t (3.3)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0.0)	0.0 (3.3)	無 (—)	(100%)	A
無除草	0.33 (89)	t (11)	t (67)	0.0 (0)	0.02 (22)	—	0.35 (189)	無	—	—

（注）一発剤処理直前の調査

5. 考 察

（1）前年の残草状況

基盤整備2年目であり、前年の雑草発生量は少程度。

（2）処理条件等（散布機械を含む）

展示区は、粒剤（播種同時）散布（クボタ社「こまきちゃん」使用）。

処理時の湛水深は0～1.0cm程度。

（3）除草効果等

前処理剤として、処理後15日程度の残効であり、ノビエに対する枯死効果（発生して枯死する作用機作）とノビエの葉齢進展抑制が確認され十分な除草効果が認められた。

展示区の6月下旬頃（一発剤処理30日後）の残草量はほとんど認められなかった（観察）。

（4）薬害等

薬害は認められなかった。

（5）作業性

播種同時散布により、大区画ほ場での省力性が確認できた。

（6）普及性等

省力的であり、一発剤処理の前処理剤として十分な効果が確認できたことから普及性が高い。

【水稻除草剤】

公所名：奥州農業改良普及センター
 担当者：門間 剛

1. 展示薬剤名 プレキープ1キロ粒剤 (ピラゾキシフェン・ベンゾビスクロン粒剤)

2. 区分 直播栽培 (播種同時・初期剤)

3. 展示方法

(1) 展示場所：奥州市前沢区生母

(2) 対象雑草：水田一年生雑草、マツバ、ホタルイ、ミスガヤツリ、ウリカワ、ヒルムシロ

(3) 耕種概要

(展示区)

土質 灰色低地土 植代日 5/4 播種日 5/9 品種名 萌えみのり
 土性 埴壤土 直播方式 湛水直播 (表面播種)
 播種様式 点播 コーティング資材 鉄
 日減水深 1.2cm/日 落水期間 5/14～25 (12日間)

(対照区)

土質 灰色低地土 植代日 5/4 播種日 5/9 品種名 萌えみのり
 土性 埴壤土 直播方式 湛水直播 (表面播種)
 播種様式 点播 コーティング資材 鉄
 日減水深 1.2cm/日 落水期間 5/14～25 (12日間)

(4) 普及展示規模 (展示区、対照区ともおおむね20a以上、無処理区を設定する)

展示区 圃場区画 30 a 調査規模 0.6㎡ 2カ所
 対照区 圃場区画 37 a 調査規模 0.6㎡ 2カ所

(5) 散布時期及び散布量

区別	初期除草剤				初・中期一発除草剤			
	薬剤名	処理時期	薬量 /10 a	処理時の雑草発生状況	薬剤名	処理時期	薬量 /10 a	処理時の雑草発生状況
展示	プレキープ1キロ粒剤	5/9 (播種同時)	840g	ヒビエ 未発生 ホタルイ 未発生 発生本数等 なし	トップガン250グラム	5/28	250 g	ヒビエ 1.5葉 ホタルイ 2葉 発生本数等 中
対照	サンバード1キロ粒剤	5/9 (播種同時)	810g	ヒビエ 未発生 ホタルイ 未発生 発生本数等 なし	トップガン250グラム	5/28	250 g	ヒビエ 2.2葉 ホタルイ 2.1葉 発生本数等 少

4. 展示成績（調査時期は一発除草剤処理前までに実施）

区 別	除草効果（草種別残草量 g/m ² 、風乾・ <u>生体</u> ）（本数）調査日 5/26						総計	水稻に対する薬害		総 合 評 点
	一年生雑草					多年生 雑草 (オモダカ)		症 状 程 度	収量比 対慣行	
	ノビエ	カヤツ リグサ	一年生 広 葉 (アゼナ)	マ ツ バ イ	ホ タ ル イ					
展 示	0	0	0.0 (27.5本)	0	t (3.3本)	(0.3) (1.7本)	0.0	なし	100%	A
無処理区の主要雑草（アゼナ、ホタルイ、オモダカ）										
対 照	0.0 (1.7本)	0	0.0 (4.2本)	0	0.0 (5.8本)	0	0.0	なし	—	—
無処理区の主要雑草（アゼナ、ホタルイ）										

* 無処理区は草種とその多少を調査する。

5. 考 察

(1) 前年の残草状況

展示区、対照区とも前年は鉄コーティング直播により水稻栽培したほ場であった。
目立った雑草は、オモダカ、クログワイで主に水口側での発生が多かった。

(2) 処理条件等

こまきちゃん（CS-30）により、播種同時散布。

(3) 播種時及び播種後の水管理方法

落水播種し、播種後ただちに入水した。

(4) 除草効果等

展示区は対照区と比較して、アゼナの発生が多かった。また、無処理区のホタルイ最大葉令が2.5葉に対し、調査区の個体は最大で2葉とやや生育が抑制されており、初期剤としての効果はあったと考えられる。

このほか、調査区以外で発生していたノビエは1.5葉期に達していたが白化しており、ヒエに対する効果が確認できた。

6/24の達観調査で発生していた雑草は、アゼナ、オモダカ、クログワイであった。

(5) 薬害等

薬害は認められなかった。

(6) 作業性

播種同時施用に対応しており、作業性に問題は無い。

(7) 普及性等

薬害が確認されなかったことから、体系処理の前処理剤として普及性は高いと考えられる。ただし、播種同時散布機のボリューム設定どおりに薬剤が落ちない場合があるため、吐出量の調整は残量を確認しながらしっかり実施する必要がある。

【水稻除草剤】

公所名：中央農業改良普及センター（西和賀）

担当者：佐藤千秋

1. 展示薬剤名 ラウンドアップマックスロード（グリホサートカリウム塩 48%）
2. 区分 水田畦畔除草（秋処理） ※新規薬剤における普及性試験（稲作生産コスト低減）
※稲刈り後の畦畔に散布を行い、翌春の刈払い回数低減効果を確認する。

3. 展示方法

- (1) 展示場所 西和賀町川舟
- (2) 対象雑草 一年生雑草、多年生雑草
- (3) 耕種概要等 一般管理を含め慣行
- (4) 普及展示規模 水田面積20 a の畦畔（10 a 区画2筆、調査規模5m² 2カ所）
- (5) 散布時期及び散布量

	薬剤名等	処理時期	薬量 (/10a)	使用方法
展示	ラウンドアップマックスロード	H25/10/28	薬量500ml 希釈水量100 ^{リットル}	雑草茎葉散布
慣行	慣行栽培管理（草刈り）	慣行	—	慣行

※周辺作物への飛散に注意すること。

※収穫前日時まで

(6) 調査内容・方法

- ア 処理前の残草状況（優先草種）について確認すること。
- イ 処理時の状況（気象条件、散布方法、処理時の雑草の大きさ（草高）等）を確認する。
- ウ 除草効果（残草調査）
越冬前（処理30日後）および越冬後（4月下旬頃）に、1区1m²程度、2～3カ所（水田畦畔内の平均的なところを選ぶ）について、草種別（イネ科、広葉）に被度（達観でその植物がどれだけの面積を占めているか）、雑草の大きさ（草高）を調査する。
なお、枯殺経過、再生状況（優先草種。イネ科雑草については再生個体の出穂期）も確認する（適宜、画像撮影しておく）。
評価は、翌年春（4月下旬頃）を中心とした抑草状況から慣行栽培管理（草刈り）の低減の可能性について行うことを基本とする。
- エ その他
除草効果を除く作業性・普及性（労働時間、コスト等）に係る項目については、実証目的に応じて参考資料を適宜作成すること。

4. 展示成績

	処理時の雑草発生状況			除草効果			
				当年秋（処理30日後）		翌年春（5/2）	
	雑草名	被度 （%）	草高 （cm）	被度 （%）	草高 （cm）	被度 （%）	草高 （cm）
展示	イタリアライグラス	80	20	80	10	イヌタデ 25	1
慣行	イタリアライグラス	80	20	80	20	33	10

5. 考察

(1) 前年の管理状況

優先草種はイタリアライグラス。畦畔管理として草刈りを実施。草刈り時期は、田植え後、6月下旬、7月上旬、9月上旬の年4回。

(2) 処理条件等（散布機械を含む）

散布時間帯は午前10～12時頃。天候は晴れ。散布直前においては、雑草茎葉への朝露の付着は見られなかった。

除草剤専用散布機（手動式）により散布。

(3) 除草効果等

処理11日目の11/8時点で、雑草茎葉の黄化が見られ、処理30日後には、雑草茎葉の著しい黄化または枯れが観察された。処理30日後の被度については、雑草茎葉の腐食は見られなかったため、除草剤散布前の80%と同等とした。

翌春の状況は、4/23の調査では展示区はフキがわずかにあるだけで、慣行区はイタリアライグラスが草丈5～10cmに達しており被度20%（雪がない所）だった。5/2の調査では展示区はイヌタデが優先し、前年優先していたイタリアライグラスはほとんどなかった。慣行区はイタリアライグラス、フキ、シロツメグサと前年と同様であった。

(4) 作業性

担当農家の草刈りは展示区、慣行区とも6/30、7/26、8/25の3回実施した。農家によると展示区の雑草は伸び方が遅かったため、最初の草刈りが楽だったようだ。

(5) 普及性等

展示区と慣行区が隣接しており、農家の作業上の都合から両区とも同時に草刈りをしたが、秋散布すると1回目の草刈り時期を遅くできると思われる。

<写真>

展示（散布）区

対照（無処理）区

4
月
2
3
日



5
月
2
日



5
月
1
4
日



平成26年度農薬展示圃成績総括（水稻）

公所名：中央農業改良普及センター県域普及グループ
担当者：長谷川 聡

作物名：水稻

○農薬名：ウィナー1キロ粒剤75・ウィナージャンボ

1. 新規成分を含有する一発処理除草剤であり、効果・薬害・普及性について検討した。
2. 植付けが浅く根が露出している株での薬害（黄化・生育抑制）発生の見られる場合があったが、全般に除草効果は高く、省力性も高い（ジャンボ剤）ことから普及性が高いことを確認できた。

○農薬名：コメット1キロ粒剤

1. 一発処理除草剤であり、効果（特にSU抵抗性ホタルイ）・薬害・普及性について検討した。
2. 水口付近や田面が高くなっている部分での残草量が多い事例はあったものの、全般に除草効果は高く、薬害も見られなかったことから普及性はあると考えられた。

○農薬名：ナギナタ1キロ粒剤

1. 一発処理除草剤であり、効果（特にSU抵抗性ホタルイ、コナギ、アゼナ類）・薬害・省力性（田植同時処理）等について検討した。
2. 除草効果が高く、薬害は軽微であり、省力性（田植同時処理ができる）が高いことから普及性は高いことを確認できた。

○農薬名：オサキニ1キロ粒剤

1. 播種時処理可能な直播水稻用除草剤であり、湛水直播（表面播種）での効果・薬害・普及性について検討した。
2. 一年生広葉雑草（アゼナ類）を除いて高い除草効果が確認できた。薬害は認められず、播種同時処理ができ、省力性も高いことから、一発剤等の前処理剤として普及性は高いと判断された。
3. 一年生広葉雑草（アゼナ類）の発生が多い圃場では、一発処理剤や後期剤との体系処理が必要と考えられた。

○農薬名：サンバード1キロ粒剤・プレキープ1キロ粒剤

1. 播種時処理可能な直播水稻用除草剤であり、湛水直播（表面播種）での効果・薬害・普及性について検討した。
2. 除草効果・薬害については特に問題なく、省力性（播種同時処理）も高いことから、普及性が高いことを確認できた。

○農薬名：ラウンドアップマックスロード ※水田畦畔除草（H25秋処理）

1. 水田畦畔への秋処理により翌春の草刈労力低減効果について検討した。
2. 秋処理により、翌春の草刈労力が軽減（慣行に比べて1回目の草刈時期を遅くでき、雑草の伸びも遅くなるため、労力が軽減される）でき、畦畔管理の省力技術として普及性があることを確認できた。